カタカナで英語を遊ぶ

伊藤善啓

花開くアチラ風のことば でも、……なぜ？

「ベラシャローム」「ガウスラポーレ」「サーパス」「アキュパル」……。何だか分かりますか？　松江市に実在する、いわゆるアパートやマンションの名前です。

街を歩いていると、やたらとこのような横文字が目に飛び込んできます。横文字というかカタカナというか、日本語の感触を得ることができない言葉に次々に出会います。女性向けの洋装店（つまり、ブティック）の名前はその典型例でしょう。車の名前もそうです。いっそ、「プレリュード」を「序曲号」、「サニー」を「太陽ポカポカ号」、「マークX」を「太郎バツイチ号」というふうに日本名に改めたら面白いかもしれませんね。

「アグレッシブなアウトドアーライフをサポートする数々のグッズ」――カタログ（これもアチラの言葉ですが）に掲載されていた野外活動用商品のセリフです。英語のようなので、これをひも解いてみると「攻撃的な野外生活を支援する数々の商品」となるわけです。果たして、何人の人が理解するのでしょうか？　それに、「攻撃的な野外生活」とはどのような生活なのでしょうかね？

更に、次のような英語の看板を美容院入り口付近で見つけた時にはアゼンとしてしまいましたよ。Let's enjoy your hair life with us!　文法どうなってんの？　ヘアー・ライフって？　僕の知っている米国人は、日本の思い出にと、この看板を記念撮影したのでありました。

まだあります。通勤路に「マギー美容室」という看板があります。「蒸し暑い美容室なんだ」と、それを見る度に思いますよ。ただし、カタカナ表示ですので、muggy（マギー）であるのかどうか分かりません。まだあります。「シャディー」は贈答品を扱う店名ですが、僕は英語のショディー（shoddy）という語を思い浮かべてしまいます。米国式の発音では「シャディー」と聞こえるからです。何と、これが「粗悪品の、質の悪い」という意味を持つから皮肉です。

文字読めるけど……意味さっぱり

どうして、こんなにも、横文字というかカタカナだらけなのでしょうか？　しかも、カタカナに置き換えるとすれば、当然発音はアチラの言葉のそれとは異なってくるのです。話が飛ぶようですが、以前、米国人青年を案内して松江市を車で走っていた時、彼は前方に見えるホテルの名前を口にして発音したのです。そのホテルの外壁には、遠くから読めるように、大きなカタカナ文字で「アーバンホテル」と記してありました。

実は彼は日本に来る前に少しばかり、日本語をかじったことがあったようで、カタカナとひらがなは読めたのです。「アーバンホテル」と読んだ彼は、続いて「なんという意味なの？」と質問してきたのです。文字は読めるが、意味不明という状況です。

「Urban Hotel（都会のホテル）のことだよ」と教えたら、「アーバンじゃなくて、ウーバンがいいんじゃない？」と彼は言ったものでした。日本語の「アー」は大きな口を開けて発音されますが、米国の英語（つまり、米語）の「アー」に当たる音は、口をそんなに開けないで、舌をのど奥に引っ張るようにして作られます。日本語の「ウー」に近いあいまいな音なのです。

そう言えば、長年米国の地で生活していた日本人が「ドクター」ではなく「ダクタ」とカタカナで表していたのを思い出しました。米国人と結婚し何十年も米国で生活している別の友人が、日本に久々に里帰りした時、電車の中で高校生達が「エムディー」と言っているのを耳にしたそうです。彼らの話と「エムディー」なるものとがうまくかみ合わなかったので、何のことかと質問したわけです。彼女は「医者medical doctor（しばしば略されてM.D.（エムディー）と言われるのです）」のことかと思ったのでした。

話を元にもどしましょう。このように、「文字読めるけど、意味さっぱり怪物君」の数が、本当に多くなってきたように思われます。日本人同士のコミュニケーションの場で、実に摩訶不思議な現象がおこっているわけです。カラオケボックスへたまに学生さんたちを連れて行きますが、ほとんどと言っていいぐらい、歌の中に英語が散りばめられていますよ。しかも、文法的な間違いもなんのその、で。歌集に載っている歌の題名を見ると英語名がずらーり。さぞかしアチラの歌手が歌うのだろうと思って、ひょいっと歌手の名前を見ると、日本人なのです。

ワラメランって？

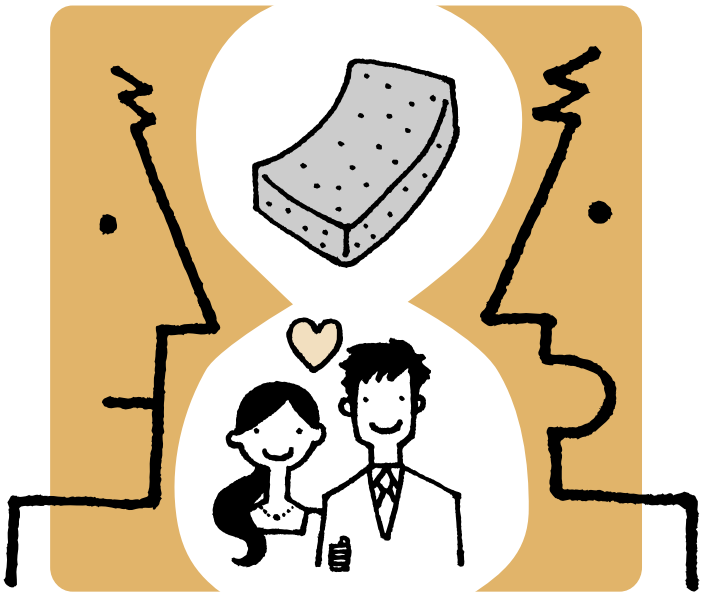
もっとも、この傾向は日本だけではないらしく、自国の言葉の美しさを誇りにしているフランスでさえも、外来語の氾濫のために頭を抱えている人々もいるとか。米国でも高級品を扱う店では、フランス語系の言葉が使われていますし、つづりだってわざと変えています。実用性を好む国民性からか、米語では発音に近いつづり方を用いています。centerは正にセンターと発音するのに抵抗がないつづりですが、ちょっと気取って、英国調をかもし出そうとする時にはcentreが使われます。eとrが入れ代れば、「セントゥレ」というように発音したくなりますよね。一方、centerは、「セナー」あるいは「セラー」と聞こえるはずです。えっ、日本の学校では「センター」と習ったって？　米国人が会話の中で使うと、そうなってしまうのです。

ちなみに、私たち日本人の耳には、「ウオーター・メロン」と発音されれば、「すいか、だあ」と分かりやすいのですが、「ワラメラン」と言われれば「？」と思うことでしょう。実は、米国流の英語発音（米語）をカタカナで書きとめたものです。米語では、waterのようなtが発音される時、舌先を上あごで蹴る位置がrまたはnのそれに近くなるのです。それにwaterのaは日本語の「ア」に近く、口を大きく開けて発音されるので、「ワ」に聞こえるわけです。What's the matter?（ファッ・ザ・マター？「どうしたの？」）が「ワスマラ」になるのも同じ理由からです。どうりで、字幕スーパーなしで映画を観ようとしても、なかなかうまくいかないはずですよね。

さて、エル（l）は、舌先を上歯の付け根に置いて作られる音ですが、日本語では用いられないので、私たちは日本語の「る」で代用する傾向にあります。しかも、英語の「ウ」と区別できにくいのです。これが悲劇の原因となるお話を一つ。かなり以前、アチラの人たちが、「カルピス」のテレビ・コマーシャルで歌っていたものでした。彼らが「カルピスCalpis」と発音するのを、僕と一緒に偶然耳にした米国人の友人が大声で笑い出したのです。なぜかわかりますか？……彼に言わせると、カルピスではなく、カウ・ピス（cow piss）、つまり、「牛のオシッコ」と発音しているということだったからです。

大太鼓と小太鼓を打ち鳴らすように

ここで、英語（米語）の発音の最大特性をズバリ。一口で言うと、「メリハリがきいている」ということです。日本語では、音が高くなったり低くなった



りして文が終わります。一方、英語は大太鼓と小太鼓を次々に打っている具合なのです。大太鼓がドオーンと強く打たれた後に小太鼓がチャッチャッチャと続くわけです。その繰り返しが英語独特の音を作っています。ですから、英語を母国語とする方が日本語で「**わっ**たくしはデスネ、きのう**よっ**こはまの、**みっ**なとにデスネ、**つっ**きましてデスネ……。（通訳しますと、「私は昨日横浜の港に着きまして……」となります）」と発音するのも無理ありません（「デスネ」を入れてやると、オハヤシのようになって調子がとりやすくなります）。

その上、私たちが簡単に発音できて、英語を母国語とする方々ができにくい発音もあります。「婚約」を「コンヤク」と発音するのに私たちには苦労がないのですが、彼らはそれを「コンニャク」と発音してしまう傾向が強いのです。日本語の「ン」を発音する時、舌は口の中で宙ぶらりんになったままで、鼻から息を抜かすのですが、英語の「ン」では、舌を上あごにくっ付けたままで終えます。ですから、その状態から、次の音である「ヤ」を発音しようとする時に「ニャ」となってしまうのです。一度試してみて下さい。

「耳の音」と「目の音」

先ほどの「ウーバンホテル」の話に帰りましょう。現在日本で外来語として使われている語には、耳に入った発音をそのまま書きとめたものと、目に入ったつづりを読みながら書きとめたものとの二通りがあるように思われます。「アーバンホテル」は、Urban Hotel が目に飛び込んできたのを発音しながらカタカナで書きとめられた結果でしょう。「発音しながら」という部分がミソです。日本語の音で代用して発音するのです。その結果、American は「アメリカン」、machine は「マシーン」とカタカナで書くことになります。目を経由して入ってきた語として書きとめられたわけです。一方、「メリケン粉」（今では「小麦粉」の方が一般的ですね）、「ミシン」というような単語も存在しています。実は、両方とも、それぞれ、American 、machine とから来ているのです。

外国から異文化がドッと押し寄せてきた文明開化のころ、外国語を日本語に取り入れることも大変な問題だったのでしょう。幸い、日本語は、ひらがな、カタカナという「表音文字」と、漢字という「表意文字」との二刀流使いなので、うまく対応できたようです。「表音文字」というのは文字の読み方（発音）を伝えるけれど、意味は運ばない。「表意文字」は全くその逆です。国際化時代と呼ばれる現代、外国の語を次々と日本語に置き換えることができるのも「表音文字」のお陰です。なにしろ、意味に無頓着のまま、発音に従ってカタカナで書けばいいのですから。ハンバーガー、コカコーラ、等々、その例に際限がありません。

「亀屋」の話

今でこそ私たちは外国語、特に英語の授業を受ける機会が与えられ、英語教育の発達と共に単語を目

にする時、それを「読む」ことができます。しかし、開国後間もない日本では、人々が外国語を目にする機会はほとんどなく、読むことができるなどということは夢物語であったことでしょう。このようなことを考える時、僕はずいぶん以前に手にした本の一節を必ず思い出します。

大体、次のような話だったと思います。当時、江戸（東京）に近い一寒村であった横浜では、外国人居留地が設けられ、彼らを相手とする日本人経営者の店が多くできた。それらの店はそれぞれ屋号を持っていたが、一番多く使われていたのが「亀屋」だった。実はそれは英語から来たのだ、という内容でした。

そこで、クエスチョンです。さて、何という英語でしょうか？――異人さん（何のことかわかりますか？）の姿を見るのさえも珍しかった当時、幼い子供連れの異人さん夫妻が、その子供に手招きしながら何かを言ったのを、たまたま耳にした日本人がいたのでしょう。「亀屋」と呼ばれると、よちよち歩きの子供は両親の方にやって来たのです。

そう、Come here! です。目経由ですと、「カム・ヒヤ」となるのでしょうが、耳からですから「カメヤ」になったのです。多分、米国人でなかったかと思いますよ。英国人なら、「ヒ」という音がもっと強く聞こえたかもしれないからです。「こっちに来て買い物してね。↓千客万来おいでやす」という、招き猫に込めた気持ちを屋号にも込めたかったのでしょう。

突然ですが、ここらあたりで関係のない話を一つ。「サランラップ」は特定商品名ですけれど、他社製造の同様な商品でもやはり「サランラップ」で済ませることがありますよね。このような現象は米国でも観られ、例えば、テレビ・ゲーム（一般的には、video game と呼ばれます）は、しばしばニンテンドー・ゲーム（Nintendo game）と呼ばれています。別に任天堂の製品でなくてもよいのです。ちなみに、「サランラップ」はプラスチック・ラップ（plastic wrap）です。プラスチックと聞けば、力を加えるとポキリと折れてしまう性質を思い浮かべるのですが、ビニールのような物でもプラスチックなのです。ですから、スーパーで買い物をした時に商品を持ち帰るために入れてもらう袋は、ビニール・バッグではなく、プラスチック・バッグ（plastic bag）と呼べばいいのです。

ミルクを注文するとき「ミルク」って言う？

さて、先ほど触れかけた「メリケン粉」や「ミシン」に話を戻してみます。もうお分かりのことでしょう。両者とも耳に直接入った音から来ているのです。確かに、米国人は「アメリカン」というよりも、「メリケン」と発音しているように聞こえます。と言うのは、「メ」で大太鼓がドオーンと炸裂。すると、その強烈な炸裂音のために、その直前と直後の音は姿を潜めることになるからです。結果的に、「ア」が消え、「カ」が更に弱い音「ケ」になってしまったのです。

一方、「ミシン」は、sewing machine（縫う機械）の sewing（縫う）が日本語に取り入れられると無くなってしまった残骸なのです。強い音「マ」ではなく、おとなしい音「ミ」が、次に来る大太鼓の音「シ」の先駆けとなる結果、「ミシン」として耳に入るのもうなずけます。

ここでまたクエスチョン。それでは、「ミルク」は耳からでしょうか？　それとも、目経由でしょうか？――多分、目経由だと思います。アチラのレストランで「ミルク、ワン」と言っても通じないでしょうから。では、耳に直接入った音によって milk をカタカナに置き換えるとすれば（つまり、「メリケン」式では）、どのように書けばよいのでしょうか？――僕は「ミヨコ」じゃないかと思っています。女の子の名前「ミヨコ」ちゃんは、アチラのレストランで通用するのではないかと思われますから。海外旅行先で、お試しあれ。

目からうろこ

おびただしい量のカタカナ語や欧米の文字に囲まれて暮らしている現在、一介の英語教師として、僕は、外国語、特に英語が日本で持つ役割を自分なりに模索しておりましたよ。しかし、いつのことだったか、「英語はアクセサリー」という一言に出会った時、「ああ、なるほど」と思わず合点している自分に苦笑したものでした。「日本のチマタで氾濫している英語は、単なる飾りであって、本質ではないよ」と解釈できるかもしれません。

そう言えば、日本人女の子によるラジオのディスク・ジョッキーでも、米国式発音の英語がやたらと散りばめられているワイ。いっそ全部英語なら視聴率はガタガタになるので、さすがにそれはしないワイ、と思ったことでした。要するにアチラの国の単語がチョコチョコっと入ればいいのですよ。文法？　関係なーい。発音？　関係なーい。かっこよく聞こえれば。

（いとう・よしひろ／英語学）

■